

長野県革新懇ニュース

2017年10月号
発行日10月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 0510-3-15971

220

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 小山仁郎さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 大北森林組合補助金不正にかかる住民監査請求を受理
- 4面 随筆「再び『一本の鉛筆』」堀井正子さん
映画評論「笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ」
読者のこえ・各地の動き、クロスワードパズル

長野県革新懇

検索



平和な社会こそが 創作活動の礎

こやま じろう さん
(染色家)

絵描をめざすも

生活のために染色家に

Q 小さい頃から絵が好きだったそうですが、友禅の世界に入られるきっかけをお聞かせ下さい。

私の10代は、時代の波に翻弄された時期でした。小学校の教育は軍国少年を育てるためのもので、その中心はほとんど戦争のための洗脳教育でした。学校には見習士官みたいな軍人が来て、軍事教練では野戦で戦うときの基本を教わりました。私はまったくの軍国少年でしたから、戦争に行くのは当たり前というもので、予科練を受験したんです。しかし、指が多少不自由だったので、不合格になって

しまいました。そのときは悔しくて泣きましたね。今思えば、幸いしたということですが・・・。

そうこうしているうちに終戦を迎えました。もともと絵が好きだったので、画家になろうと考えたんですが、16歳の頃、父親が亡くなり、さらに農地改革で土地を大分取りあげられ、一気に貧乏百姓になってしまいました。残されたお袋と兄妹6人です。うかうかということで、百姓を継がなければという気持ちも半分ぐらいあったんですが、やはり画家の道を諦めることができなかった、お袋に自分の気持ちを話したんです。そうしたら、とにかく体だけは大事にして、お前のやりたいことだったらやれと、涙ながらに私を送り出してくれました。

東京に出て、ある画家の先生を訪ねてきました。東高円寺の焼け跡の中にバラック小屋のアトリエがありました。ともかく事情を話して、勉強させてもらうことになりました。当時は本当に食糧が不足していて皆が栄養失調状態で消しゴムの代わり使う食パンを食べちゃうんですね。だから口の周りが真っ黒なんです。やっぱり栄養失調になってしまい、私たちの様子を見かねた先生が、こんな状態で勉強したって続かない、絵描きは止めた方がいいと言われ、食べるためにということと染色友禅の先生を紹介してくれました。

その方が東京で有名な倉谷憲作氏という絵師です。たまたま松代の出身だったことから、すごく話が合って、やる気があるなら面倒見てやるから来いと言われ、ただし、修行期限は4年間という条件でした。昼間はもちろん、夜もキャンパスに向かって一生懸命やりました。1ヶ月、2ヶ月と職人さんと一緒にやっていくうちに、これは大変な仕事だな、奥が深いなと初めて感じてたんです。今はペインティングだから間違っても消せますが、当時は真っ白な絹に染みを一つ着けたらもうおしまいなんです。そういう緊張感のある仕事があったらなくて、気持ちがどんどん引き付けられていきました。

ところが、3年目のときに一種の挫折感が出て、辞めた方がいいのかなと悶々とした時期もありました。でも、16、7歳ぐらいの若い人達が昼夜一生懸命やっていたし、かなり年数の入った職人さんが、大きな作業台に白いシルクの着物に仮縫いした生地を広げて、脇目も振らずに自分の思う花鳥風月の草木をもの凄いいスピードで下絵に描くんです。それを見ていたら、またやる気が起きてきて、この人たちには負けられない、思い直してまたやることになったんです。

4年が過ぎたとき、とりあえず約束した年季だから、これからは自力でやるんだぞと言われました。しかし、先生は、お客さんを紹介するから、そこから友禅の仕事にたいして頑張つてやってみろ、まだまだ貧しい戦後だけど、多少でも経済が順調に復興してくれば、いずれは日本の女性も必ず着物を着る時代が来る、だからそれを信じてきちんとした職人になれよと励ましてくれました。

その頃は友禅の糊を落とすために、友禅流しと言って、川の両側に杭を打ってそこに紐を張って、そこに一反16メートルの布を流すんです。たまたま小石川の方だったので、すぐ目の前に神田川が流れていて、その両岸に桜の木がいっぱい植わっていました。朝5時頃から職人さんたちが始めて感じた反物を、20枚位、紐に引っかけ流しながら洗うんです。それが見事なんです。反物を水に濡らすと染料の色が光り輝いて、川の流れに泳ぐような感じで流れていく、そして4月頃、春風が吹くと、桜の花びらが散って川に落ちるんです。その花びらが友禅流しをやっている生地の上に落ちるんですよ。その桜の花びらと友禅の染め抜いた花びらと地色が重なってね、正に生き生きとした作品に見えるんです。これには一番感動しましたね。それを見たら、改めて絶対この仕事でやっていこうという気持ちになりました。

新宿の下落合の辺りに仕事場を構え、染色家としての第一歩を始めました。もう60年程経っていますけど、あのときの風景がまだ頭の中に残っています。だからいつもそれを思い描きながら初心に返って仕事をしています。もう87歳になる老人が生き生きとした感じになるのも、それを出すからなんです。だから、もっととやらかないかな、もっと良い仕事ができるんじゃないかと、いつもでき上がった仕事を見ながら、また次の仕事を考えます。

そういうわけで、画家になる志をたてたのが、おはなししたような形で横道に逸れ、逸れた道が人生の本流になったということです。

言葉では表せない

奥深い草木染友禅

Q 草木染友禅とはどのようにつくられるのですか？ また、受賞などの創作上のエピソードをお聞かせ下さい。

口で説明してもなかなか分からないですね。実際に私が下絵を着けたり、糊を置いたり、そこに刷毛でもって色ざししていくと、納得してもらえるとありますが、言葉で表現するのは難しいです。だから染色をやりたいと来る子には、ここに2、3回来て私の仕事を見て、自分なりの仕事のあり方を考えながらやれば納得いくと言います。ふつう会話の中では分からないですね。そのくらい奥が深いし、他の仕事にない知恵があるんだと思っています。

【2面に続く】